

〈翻訳〉についての若干の覚え書き

辻野裕紀

1. はじめに

本稿の目的は、〈翻訳〉という営みを多面的に瞻視するところにある。翻訳については既に許多の論考があり、網羅的に言及することは到底できない。本稿は、翻訳に関わる様々な視点のうち、とりわけ筆者が重要だと考えているものの一部を、鄙見とともに、覚え書きとして断片的に書きつけたものである。

2. 翻訳と対照言語学

筆者の専門は言語学であるが、まず、翻訳は言語学、就中、対照言語学との関連が深いものである。

対照言語学という学問が、2つの言語のあわいを遊弋しつつ、両言語の類似点と相違点を焙り出すことをその目的とするのであれば、その過程においては、翻訳という営為が、意識的にせよ無意識的にせよ、介在することとなる。一方の言語の要素 A を、もう一方の言語の要素 A' と等価だと擬制することによってはじめて両言語を較量することが可能になるからである。この点で、翻訳と対照言語学は親和性が高い。

対照言語学は、名称が類似した比較言語学とは大きく異なり、応用言語学的な側面が強い。その濫觴が、第二次世界大戦後のアメリカにおける、言語教育への貢献という実践的な動因にあることを確認するだけでも、対照言語学の道具性が垣間見える。

対照言語学の成果は、言語教育のみならず、翻訳実践の場にも活かし得る。対照研究自体が、翻訳テキストを用いて遂行されることも決して寡少ではなく、翻訳テキストに分析を加えて、まず言語事実を帰納的に闡明する。そして、そこで得られた知見をさらに別の翻訳の実践に活かすということが可能である。したがって、言語研究というテオリアと、翻訳というプラクシスは、言ってみれば、円環的な関係にあって、互いが互いを支え合っていると行ってよい。この点において、翻訳と対照研究は相互依存的である。

日本語と朝鮮語のように、似て非なる言語間の翻訳は、その絶妙な差異ゆえの独特な困難を伴うものであるが、そうした見えにくい違いを明らみに出そうとする対照言語学的思考は、より自然な翻訳の産出に裨益するものと思われる¹。

3. 翻訳のペシミズムとオプティミズム

あらゆる言語は、それ以外のいかなる言語とも置換し得ない、それ自体がかけがえのない固有の価値を持つ。それゆえ、あらゆる翻訳は不可能である——翻訳に対するこうした潔癖なるペシミズムは、しばしば〈翻訳不可能性〉という名のもとに語られる。

¹ 辻野裕紀 (2021a), 辻野裕紀 (2022) なども参照されたい。

沼野充義（1995: 76）は、「フランス語でラブレーを読むのと、渡辺一夫訳でラブレーを読むのとでは（中略）はたして、同じ体験と言えるのだろうか」としつつ、「翻訳とはもともと近似的なものでしかなく、その前提を甘受したうえで始めて成り立つ作業ではないのだろうか」と述べている。ある種のペシミズムである²。

哲学者のクワインがつとに〈指示の不可測性〉や〈翻訳の不確定性〉についての議論を展開したことは周知の通りである。音と指示対象の結びつきは原理的に確定し得ず、「正しい翻訳」というのは存在しない。したがって、翻訳は一意的に決まらない。これも一種のペシミズムと関連づけることができるだろう。

しかし、筆者は〈翻訳の不確定性〉を翻訳のオプティミズムと見る。〈翻訳の不確定性〉が単一の言語内においても同断であることを想起すれば、それは首肯されよう。ある言語形式の外延が自身と他者とで一致する保証はどこにもなく、個人史によって規定される〈言語的対象世界³〉も人ごとに異なる。言語的対象世界は外部を持たず、各人の主観の中のみ存する。これは言語というものの圧倒的な弱さである一方、そうした個々人の言語的異なりが、おのおのの唯一無二性を支え、コミュニケーションを賦活させていることを顧慮することで、我々は翻訳というものが本質的に内包する冀望を見出すことができるように思料される。〈翻訳の複数性〉と〈複数の翻訳〉——これは個のかけがえのなさの証左と言ってよい。

こうした思考は、〈作品は作者の意図から切り離されて新たな意味を形成する〉と考える言語観、文学観へと繋がる。例えば、1960年代の、ラシーヌ研究の権威レーモン・ピカールとの争論の中から現出してきた、ロラン・バルトの「作者の死」で展開されている議論と、このオプティミズムは自ずと響き合っていく。そして、その究極形のひとつは、ピエール・バイヤールの思想であろう⁴。

4. 翻訳によって言語を改鑄する

管啓次郎（2005: 306）は次の如く道破する：「言葉ほどよく死んだものはない。生きた言葉、という表現は大嘘だと思ふ。言葉はすべて死んでいる、かたちを変えない、同一性を保っている。生きた言葉とは、すべて死んでいる言葉の組み合わせにより生じる新奇さや落差が運動感として感じられ、沈黙する文字の配列のむこうに幻影の音が聴こえる気がする場合をさすにすぎない」

言語内的なこうした要素の布置結構の新奇性が齎すことばの流動化は重要である。しかし、淀んだ言語を清新なものにするためのもうひとつの方途として、翻訳が機能する。

ヴァルター・ベンヤミンは、翻訳というものを、ことば自らを「自己再帰的」に問うために、異なる言語と「照応」させる行為と考えた。そのために、ベンヤミンは、「字句通り」の翻訳（直訳）を目指し、原作に対する忠実性で言語を自壊させることも躊躇わない。そうして、他の言語と響き合う回路を開き、ひとつの言語を形成し直す可能性を翻訳に見出す⁵。すなわち、翻訳

² 沼野充義（1995）は、この直後にそれとは対極的なオプティミスティックな見解も提示し、もう少しニュートラルな議論を丁寧に行なっているが、それについてはここでは措く。

³ 〈言語的対象世界〉については、野間秀樹（2021）を参照のこと。

⁴ こうした、テキストをめぐる思考の通時的潮流については、郷原佳以（2020）が参考になる。

⁵ 渡邊英理（2020: 70-71, 90）参照。

という行為によって、内閉的で硬直化した言語を刷新していくということである。そして、なぜそうしたことが可能なのかというと、ベンヤミンは、各々のローカルな言語を超えた、グローバルな〈純粹言語〉なるものが、言語全体に覆いかぶさっていると考えるからである⁶。

〈純粹言語〉という概念はあまりにも思弁的で、本稿の埒外なので、ひとまず措くが、ある言語を改鑄するための装置としての翻訳という視点は百たび強調されてよい。これは当該言語を母語としない、いわゆる〈越境作家〉たちが、言語を風通しのよいものに作り変えてきたことを想起させるかもしれない。例えば、ジュンパ・ラヒリはイタリア語、グカ・ハン⁷はフランス語、李琴峰は日本語を〈創っている〉。リービ英雄（2001）は「生まれた時からこのことばを共有しない者は、いくら努力しても一生「外」から眺めて、永久に「読み手」でありつづけることが運命づけられていた」、「ぼくは、日本語の歴史の一部になりたかった。英語でも書ける内容を日本語で書くのではなく、日本語を書きたい、日本語をつくりたい、と思った」と21世紀の劈頭に叙述していたが、日本語圏においても、いまや日本語を母語としない書き手が日本語で文芸創作をすることがごく自然な営みになりつつある。小説の領域に限らず、ジェフリー・アングルスのような詩人や、カン・ハンナのような歌人も活躍している。

こうした思考にとって、ドゥルーズとガタリの〈言語の脱領土化〉という概念も重要である。言語の脱領土化とは「ある言語の内において、その言語の外に出ること」だが、それは、その言語の使用それ自体をやめたり、別の言語を話したりすることではなく、むしろ、その言語の内側にいながらにして、その言語が異質なものに変化してゆくよう働きかけることである。換言するならば、自分の言語の中で「どもる」「外国人＝異邦人のようである」ことである⁸。

近代以後の文学は、母語をいわば「外国語」のように書くことによって成り立ってきた。それは例えば、カリブ海のグアドループの作家マリーズ・コンデの「あらゆる言語は作家にとって外国語です。作家はそれら外国語を解体して、自分だけに固有の小さな音楽を鳴り響かせるのです⁹」という言辞に象徴的に表われているが、ポストコロニアル文学において、ドミナントな言語の中に、マイナーな言語を内在させ、実装することは、主要な技法と言ってもよい。沖縄文学の崎山多美や、在日文学の金石範や李良枝の作品群にも、そうしたありようが散見される。

かくして、他言語との接触や擦過によって言語を作り替えることは、新たなる〈文体＝style〉の創出を意味する。最初は生硬な表現であっても、反復されることによって〈文体〉となっていく。文体とは、幾度となく反復されてきたことばのスタイルの謂にほかならない。朝鮮語学徒であれば、漢文の諺解によって、中期朝鮮語の文体＝書きことばが生成されたことを想起すればよい。これについては、あとでも少し論及する。

5. acceptance と domestication の力学

翻訳とは、acceptance と domestication の力学だと断じて過たない。やや正確さを欠くが、

⁶ ベンヤミンの翻訳論や純粹言語の詳細については、「翻訳者の課題」が収められたベンヤミン、ヴァルター（1994）を参照。また、ベンヤミンの言語思想を考えるには、柿木伸之（2019）などが参考になる。

⁷ グカ・ハンの言語観については、ハン、グカ（2022）、ハン、グカ×辻野裕紀（2022）が日本語で読めるものとしては最も詳しい。

⁸ 渡邊英理（2020: 71-72）参照。

⁹ コンデ、マリーズ（2001: 40）参照。

話を分かりやすくするために、「直訳」か「意識」かの相克ないしは角逐と読み替えてもよい。翻訳のありかたを考量するとき、直訳／意識をめぐる問題は必ず争点となる。

翻訳の本態的な姿態は、直訳であった。『伝奇集』などで知られるアルゼンチンの大作家ボルヘスは、生硬な直訳＝逐語訳は「神学に由来する」ものと信じて述べている¹⁰。神の「無限の、永遠の知性によって書かれたテキストを勝手にいじり回すのは、いわゆる冒瀆¹¹」であり、一言一句を原文に忠実に訳出しようとするかかる構えが、神学的なテキスト以外にも拡大、波及していく。

しかしながら、一方では、リーダビリティを重視する「意識」という考え方もあって、両者は常に実践的に競合している。これは、二項的な信念対立であって、value questionなので、その解は一種の position statement にしかなり得ない。

米原万里（1998）が「不実な美女」か「貞淑な醜女か」という卓抜な比喻を用いて、これを表現したのはあまりにも有名である。勿論、どちらが好まれるかはケースバイケースであり、またそこには階梯がある。

朝鮮語学徒であれば、金素雲訳の『朝鮮詩集』（岩波書店）と金時鐘訳の『再訳 朝鮮詩集』（岩波書店）との比較を即座に連想するだろう。金素雲の陶然とするような流麗なる日本語訳が島崎藤村や北原白秋、佐藤春夫、棟方志功らによって高く品騫されたことはよく知られている。しかし、日本語としては練達していても、朝鮮語の原文とは逕庭があるものも少なくなく、翻訳というよりも、翻訳的創作、ポイエシスである。

崔真碩（2009）は、翻訳者、役者、さらには文学者でもある自らの「闘いの現場」をベースに興味深い翻訳論を展開しているが、その中で、李箱の「翼」の一節の長璋吉訳と自身の訳とを対比、比考している（下線は引用者）：

肉身이 흐느적흐느적하도록 疲勞했을 때만 精神이 銀貨처럼 맑소. (이상 「날개」)

・肉体がぐにゃぐにゃになるほど疲れた時にだけ、精神は銀貨のように一点の曇りもなく澄みわたります。（長璋吉訳）

・肉体がふにゃふにゃになるくらい疲労したときにだけ、精神は銀貨のように澄みわたる。（崔真碩訳）

そして、「意識するということは、つまり、日本語の味わいを肉付けし、意味を付け足すことで、訳文を日本語として通りのいいものにすることです。意識をすれば、一見、通りがよく読みやすい、いい訳文になります。しかし、度が過ぎると、朝鮮語のもつ味わいは損なわれ、原文を逸脱してしまいます。そして、意味が過剰になっていく¹²」と述べている。

また、この一文だけで、我々は하오体の問題や、（崔真碩は触れていないが）疑似会話体、役割語としての하계体の問題などへと議論を拡張させていくことが可能である。

尹東柱の「序詩」も古くからその訳をめぐるは、甲論乙駁の論議が行なわれてきた（下線は引用者）：

¹⁰ ボルヘス, J.L. (2011: 102) 参照。

¹¹ ボルヘス, J.L. (2011: 102-103) 参照。

¹² 崔真碩 (2009: 44) 参照。

죽는 날까지 하늘을 우러러
한 점 부끄럼이 없기를,
일새에 이는 바람에도
나는 괴로워했다.

별을 노래하는 마음으로
모든 죽어 가는 것을 사랑해야지
그리고 나한테 주어진 길을
걸어가야겠다.

오늘 밤에도 별이 바람에 스치운다.

「序詩」の日本語訳としては、とりわけ、伊吹郷訳¹³と金時鐘訳¹⁴が有名だが、下線部の伊吹郷訳の「生きとし生けるものをいとおしまねば」が大論争になったことは周知の通りである。金時鐘は「すべての絶え入るものをいとおしまねば」と訳している。「序詩」の日本語訳をめぐる諸問題については、金智英（2017）などを参看されたい¹⁵。

6. 言語の物質性と翻訳：テキストとストーリー

翻訳とは、異言語で書かれたのっぺりとした「情報」の伝達ではない。原語が纏う物質性——「質感」などと言い換えてもよい——の伝達である¹⁶。もとの言語が湛える物質性を可及的に維持しつつ、別の言語へと移すことである。巷間には——というより学界にも——言語を「情報を伝えるための道具＝ツール」と見做す誤想が瀰漫しているが、率直に言って、これは病識のない唾棄すべき病理である。テキストとは感覚的、触覚的なものであって、〈物質性の移し替え〉という視座が欠落した翻訳は「良い翻訳」とは到底言えない。text という語が、肌触りや質感といった意味の texture と同根であることを考えれば、それは分明であろう。物質性を随伴する「テキスト」とあらずじとしての「ストーリー」は大きく異なり¹⁷、「ストーリー」ではなく、眼光紙背に徹して「テキスト」を「テキスト」としていかに翻訳するかが、翻訳者が頻回に逢着する不可避の隘路だと言いうる。

7. 三角関係としての翻訳論

波田野節子（2008: 247）は「翻訳の力学は、原作者と翻訳者の2者ではなく、読者も入れた3者のあいだで働く三角関係のようなものだ」と述べ、三島由紀夫（1959: 112）の「語學がで

¹³ 尹東柱全詩集 空と風と星と詩』、伊吹郷訳、影書房、1984年。

¹⁴ 尹東柱詩集 空と風と星と詩』、金時鐘編訳、岩波書店、2012年。

¹⁵ 尹東柱については、辻野裕紀（2021c）でも論及した。

¹⁶ 言語の質量や質感といった問題は、野間秀樹（2021: 65-68）も参照のこと。

¹⁷ 郷原佳以（2020: 18-19）、また、蓮實重彦（2018）も参照。

きないからと言つて翻譯文にケチがつけられないなどといふ馬鹿なことはありません。翻譯文はかりにも日本語であり、日本の文章なのであります。語學とは關係なくわれわれは、自分の判断でよい翻譯文と悪い翻譯文を區別することができるのであります」という一節を引いている。

潜在的な読み手を考慮しつつ、いかなる日本語へと移植するのか。訳者の文体や語彙によって、読者の内面に立ち現れる心象風景は大きく異なってくる。K文学ブームの到来で韓国文学が「大衆化」したことにより、韓国文学翻訳者にとってもこの「読者」の視点はさらに重要なものとなっていくだろう¹⁸。

8. 誰のための翻訳か=メッセージの宛先

前章とも関連するが、「誰のための翻訳か=メッセージの宛先」という問題も重要である。

例えば、山本真弓編著(2004: 183)から分かりやすい例を引くと、成田空港の到着口の表示は、上に「おかえりなさい」、下に「Welcome to Japan」とある。これを逆にして、「日本へようこそ」、「Welcome back」としたら、違和感が生じるだろう。また、東京のある大きな神社には境内に「関係者以外立ち入り禁止」という立て札があり、その英訳は「off limits」(=立ち入り禁止)となっているそうだが、このことは、英語しか分からない「関係者」は存在しないということを暗意している。あえて「staff only」としないのはなぜなのか、一考の余地があろう。

こうした翻訳の根柢には、ある種の偏見が見え隠れすると批判することもできるが、メッセージの宛先が誰なのかによって、翻訳が変容することを示す好個の例である。これが文学作品ともなれば、より複雑化するの自明であろう。

9. 世界語からヴァナキュラーへ=俗語への翻訳

周知の通り、近代に至るまでは、世界はいくつかの「帝国」に覆われていて、そこでの共通言語は文字言語であった。東アジアは漢文、西ヨーロッパはラテン語、イスラム圏はアラビア語、といった具合で、これらを「世界語」と称する。nation stateは、そうした帝国から分節化する形で現出するわけだが、nation stateの創出には、vernacular = 俗語を基に「国語」を創ることが必要であった。これは、単に俗語を文字にして書きつけるということではなく、新たに〈書きことば〉としての「国語」を生み出すということである。そして、これはとりもなおさず、書きことばの文体 = styleを案出するというにほかならない。ルターが聖書を俗語へと訳し、それが近代ドイツ語の基となったように、世界語を俗語に「翻訳」することによって、「国語」が形成され、書きことばが彫琢されていく。歴史上、翻訳が果たしたこうした役割も、ここで今一度確認されてよい。

朝鮮半島における、訓民正音の創制や、志部昭平(1986: 52)が「世宗王の「正音中心主義」ともいうべき理念と文字使用の意識が明確に伺われ」とした、エクセプションな『龍飛御天歌』『月印千江之曲』などについては、ここでは論じないが、ヴァナキュラーであった朝鮮

¹⁸ K文学の現況については、東洋経済オンラインに掲載された拙文「韓国文学ブーム引っ張る「女性作家たち」の凄み: フェミニズム文学とクィア文学という新潮流」(2022年2月23日)を参看されたい: <https://toyokeizai.net/articles/-/513653>

語の書きことばも〈諺解〉¹⁹と名付けられた、ほかならぬ「翻訳」という方法を通じて造形されていったことは、翻訳を語る上で欠かせない史実である²⁰。

翻って、漢字漢文一辺倒の朝鮮半島とは異なり²¹、日本列島においては、「漢字文」と「仮名文」の〈二重文語性〉が平安時代以降見られ²²、『古事記』、『御堂閔白記』、吾妻鏡体、候文などの和化漢文（変体漢文）も発達するが、日本語の文章もやはり「漢文を解説する作業の中から生まれてきた²³」ものである。子安宣邦（2003: 74）は「訓読とは翻訳である」と判じている。

さらに言えば、〈読むこと〉と〈書くこと〉は相即不離であって、その後、明治時代の知識人たちが、「外国語」のテキストを読み、それを日本語に訳すことによって、新たな日本語の単語を大量に作り、同時に日本語の新しい書きことばの文体を創り出してきた。「社会」「個人」などといった〈翻訳語〉の個別具体的な成立については、つとに柳父章（1982）が仔細に論じており、ここで縷述する必要はないだろう。

なお、パロールとエクリチュールは、オントロジカル＝存在論的に大きく違う。話すように書くことは原理的にできない。ここに書きことばを創出する難点がある。極めて単純化して言えば、西洋の思想史では、プラトンからフッサールに至るまで、伝統的に音声言語がオリジナルで、文字言語は音声言語のコピーだと考えられてきた。これは文字よりも声に価値を置く思想（音声中心主義）であり、ジャック・デリダはこの思想を論難している。文字言語は決して音声言語の複写ではなく、双方間には懸隔＝差延が存在する²⁴。

10. 翻訳を通じた「日本語」という単位の発見

ところで、これまでア・プリオリに「日本語」という語を用いてきたが、思想家の酒井直樹は、明治期の西欧語の翻訳は日本語の書きことばや文体を生み出しただけでなく、翻訳によって「おそらく日本ではじめて「日本語」という単位そのものが自覚されるような事態が起きてきた」と喝破する²⁵。そして、その前史＝準備段階として、例えば、江戸期の蘭学があるとする²⁶。

さらに、酒井直樹・西谷修（2004: 118-120）のやや晦渋な議論を筆者なりに整理、敷衍すると、論理的に日本語というのは種概念だが、種概念の存在は類概念の存在とリンクする。とすれば、「日本語」という概念の成立と「言語一般」という概念の成立は共時的でシンクロしていなければならないわけで、特殊性と特殊性の間の差異を共約化させる種差を創出するデバイス

¹⁹ 漢文と朝鮮語のバイリンガルテキストは、中国清朝の「満漢合璧」も想起させる。

²⁰ 朝鮮半島における書記史や韓漢両言語間の言語接触については、伊藤英人（2013）などが詳しい。

²¹ 朝鮮半島においては、訓民正音創制後も1894年の甲午改革までは、公の文章語は漢文であった。

²² 亀井孝（1989: 1607）参照。

²³ 亀井孝（1989: 1607）参照。

²⁴ 詳細は、デリダ、ジャック（2005）参照。

²⁵ そもそも言語が単なるコミュニケーションの手段としてのみ機能しているうちは、自分が「何語」を話しているかは問題とならない。言語がアイデンティティや言語共同体への帰属意識と結びつき、さらに、「民族」や「国家」といった概念と結びついていくことによって、自分が「所有」している言語が何かという問題が現出してくる。辻野裕紀（2020: 75）参照。また、興味深いことに、田中克彦（2001: 34）は、パミールに近い民族は、自分の母語を問われて隣接の種族語の名を挙げたという例が報告されていることを指摘している。このことは言語の政治性を如実に示していると言ってよい。

²⁶ 酒井直樹・西谷修（2004: 110-111）参照。

として、翻訳が機能したのだと言える。

11. 朝鮮半島における通奏低音としての日本語²⁷

表層には「翻訳」が前景化していなくても、その奥底に他の言語が沈潜しているということがしばしばある。例えば、植民地期以降の朝鮮半島の言語実態がそうである。

近現代史における日本語と朝鮮語の関係を考えてみると、日本語は帝国＝宗主国の言語、朝鮮語は植民地の言語で、そこには位階差、非対称性が歴として存在していた。植民地期の朝鮮の書き手たちはみな日本語を通して「近代」という概念や近代的な概念群、そして「文学」を学んで受容していった。したがって、植民地期の朝鮮の小説家や詩人たちは、まずは日本語で創作して、あるいは日本語で思考して、それを朝鮮語に翻訳するということをしていたわけである。実際、例えば、李人植、李光洙、金東仁、朱耀翰といった、近代朝鮮の代表的な文学者たちの処女作は日本語で書かれたものであった。このことは、日常的な皮膚感覚の言語は別として、彼らの知的な思考は日本語に統べられていたということを意味する。例えば、金東仁はのちに、「なつかしい」「～にちがいがなかった」などといった日本語的な表現を朝鮮語にどう翻訳すればいいか、個々の日本語にそれぞれ当てはまる朝鮮語を得るのに多くの時間を費やした、というようなことを、回想録の中で述懐しているという²⁸。そして、このような形で朝鮮の近代文学が作られていくため、当然のことながら、日本語の影響を朝鮮語が強く受けていく。こうした朝鮮文学のありようを、プロレタリア文学者で、解放後、北朝鮮に渡った林和は、〈移植文学〉と称呼した。

こうした事実を背景として、1945年に朝鮮が日本から解放されても、朝鮮人、とりわけ知識人階層は、日本語から解放されることはなかった。つまり、日本からの解放は、日本語からの解放を意味しなかったということである。ひとたび身体化されたことばは、それがよしんば厭忌すべき侵略者の言語だとしても、そう簡単に剥がすことはできない。日本語は、彼らの思考や感情を統制するドミナントなことばとして内面化され続けていくわけである。このことは〈国家の解放と言語からの解放にはタイムラグがある〉と定式化してもよいだろう。

例えば、1950年代に活躍したアプレゲール＝〈6・25世代〉の作家たちは、言語形成期が植民地時代であったため、解放後、朝鮮語を学び直して、自身の言語体系を改鑄しながら、創作せざるを得ないという状況にあった。つまり、彼らは常に日本語と対峙しながら書いていたわけで、彼らの朝鮮語の文体は生硬だと指摘されたりすることもある。現象面では朝鮮語による表現であっても、そこには日本語が恒常的に通奏低音として伏流していたのである。

アンガージュマン文学の詩人である金洙暎は、「独立後二十年、初めて日本語から韓国語への翻訳の疲れを感じずに文章を書く」というようなことを書いている。こうしたことから、朝鮮が日本から独立しても、その後も長らく日本語が揺曳していて、彼らはその呪縛を生きていたのだということが分かる。

言語は「単なるコミュニケーションのツール」だとよく言われる。「単なる道具なのだから、通じればいい」「それより中身が大事だ」のような、〈言語道具観〉、〈言語道具視観〉に毒された言説を、大学の言語教育の現場でさえ耳にする。筆者はこうした思想を様々な媒体で批判し

²⁷ 本章の殆どは、辻野裕紀（2021b）で論じた内容と重複する点、ご寛恕願いたい。

²⁸ 南富鎮（2006: 79）参照。

できたが、まさにこうした〈日本からの解放〉と〈日本語からの解放〉が全く別のレイヤーに属する問題であるという歴然とした事実は、言語が単なるツールではなく、人間の存在の根幹に関わるものであるということを示している。いわゆるチカーナで、英語とスペイン語のあわいに生きたフェミニスト、グロリア・アンサルドゥーアはこう言っている：「私とは、私のことば、なのだ。私のことばに自信をもてるようになるまでは、私は自分に自信を持つことができない」——これは含蓄に富んだ言辭である。ことばとは自分自身であり、そのことばを愛でることができるかどうかということが、自身を肯定するための鍵鑰になるということだろう。そして、その「私のことば」というのが、侵略者のことばであったとき、果たして自分自身を心から愛せるだろうかという問題に、我々は逢着する。このように思考を巡らすとき、ことばを強制するということは、その人自身の存在への肯定感をも脅かすという点において、許しがたい暴力だと言える。歴史的なコンテクストは異なるが、アンサルドゥーアのことばというのは、植民地期を経験した朝鮮半島の方々や在日コリアンの方々の思いとも通ずるところがあるのではないかと筆者は推察する。

一般的に言って、母語は、選ぶことができない。例えば、筆者は気づいたときには既に日本語母語話者として「在った」。精神分析家のジャック・ラカンの術語を使えば、いつしか〈象徴界〉が出現していた。このことを筆者は〈選択不能な恣意性〉と呼んでいる²⁹。ハイデガーの「被投性」ということばを借りれば、我々の母語は〈被投性を帯びた存在〉と言うこともできるだろう。しかしながら、他者から言語をアーティフィシアルな形で強制されたとき、そうした言語の本態的なありようは、自ずと歪められることになる。

金石範(2001: 175)は、「日本語の持つ民族的形式(つまり、音、形などの物質的、個別的側面、いわゆる能記——意味するもの——にあたる)の機能が、朝鮮人の私を束縛する」とし、「その束縛は、民族語である日本語そのものの機能(論理的側面)と、日本語が過去の支配者、われわれの言語を含めて民族的なものの収奪者のことばであったという倫理的側面が一体になったものだ」と述べている。

「論理」と「倫理」の双方から束縛されている——これは齟むべきことばである。金石範の世代の在日コリアンの書き手たちというのは、こうした二重の負の感情を抱きながら、あるいは場合によっては、アンビバレントな思いを持ちながら、日本語と向き合ってきた。これは作家に限られた話ではない。そして、今の在日コリアンの多くは、「日本生まれ、日本語育ち」の世代であるため、「母国語」の朝鮮語はほとんどできず、日本語のみを有しているという場合が圧倒的に多い。勿論〈言語は国家のものではなく、個に属するものである〉という、言語論の極めて基本的なテーゼに照らせば、特段珍しいことではないが、ジャック・デリダ風言えば、「たった一つの、私のものではないことば」をどう生きるかという、植民地支配が齎したこの論件は、いまなお今日的な問題として、我々に鋭く追ってくる。

金石範の言う、日本文学の「優位性」という問題も一度は考えてみなければならない³⁰。前陳した通り、金素雲訳の『朝鮮詩集』——もともとは1940年に「乳色の雲」という名で河出書房より刊行されており、1930年代末から猖獗を極める「朝鮮語抹殺政策」の中で消えてしまうかもしれない朝鮮語の詩を何とか日本語でも残そうとした魂の試みとも言えるだろう——は、日本語として極めて洗練された玄妙なものであり、日本の多くの知識人から高く評価され

²⁹ 辻野裕紀(2016: 7)参照。

³⁰ 金石範(2009: 12-14)参照。

だが、これは当時の日本人の「上から目線」の値踏みのように見えなくもない。ある種のオリエンタリズム（エドワード・サイード）にも通ずるような態度も触知される。

朝鮮語学徒が、翻訳を思考の俎上に載せるということは、やや牽強附会ぎみに感じられるかもしれないが、こうした歴史や文学について、思いを致すことでもある。かかる背景の思念を抜きにして、日韓・韓日翻訳を語ることなど到底できないし、してはなるまい。

12. おわりに

以上、狭義の言語学の枠に止まらず、言語論や文学、思想などの知見をも参照点としながら、翻訳をめぐる諸問題について、思考を傾けてきた。体系的な行論には程遠く、雑駁な論議に終始する形となったが、翻訳という営みを本格的に考えるための複数の思路を提示したつもりではある。当今、かつて想像だにできなかった速度で韓国文学が陸続と日本語に翻訳されているが、それに比して、言語を〈移す〉〈訳す〉という行為の本質を根問いするような議論はあまり活発に上下されていないように思われる。謬見も多かろうと懼れつつ、本稿がそうした討究のささやかな端緒となることを願う次第である。

参考文献³¹

- 青山学院大学文学部日本文学科編（2009）『異郷の日本語』、東京：社会評論社
- 伊藤英人（2013）「朝鮮半島における言語接触：中国圧への対処としての対抗中国化」、『語学研究所論集』18、東京：東京外国語大学語学研究所
- 柿木伸之（2019）『ヴァルター・ベンヤミン：闇を歩く批評』、東京：岩波書店
- 亀井孝（1989）「日本語の歴史」、亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第2巻 世界言語編（中）』、東京：三省堂
- 柄谷行人（2005）『近代文学の終り』、東京：インスクリプト
- 金智英（2017）「尹東柱詩の翻訳問題再検討：茨木のり子による伊吹郷訳評価を通して」、『境界を越えて：比較文明学の現在』17、東京：立教比較文明学会
- 金石範（2001）『新編「在日」の思想』、東京：講談社
- 金石範（2009）「文学的想像力と普遍性」、青山学院大学文学部日本文学科編（2009）所収
- 郷原佳以（2020）「テキスト」、三原芳秋・渡邊英理・鶴戸聡編（2020）所収
- 子安宣邦（2003）『漢字論：不可避の他者』、東京：岩波書店
- コンデ、マリーズ（2001）『越境するクレオール：マリーズ・コンデ講演集』、三浦信孝編訳、東京：岩波書店
- 酒井直樹・西谷修（2004）『増補〈世界史〉の解体：翻訳・主体・歴史』、東京：以文社
- 志部昭平（1986）「中期朝鮮語（1）：ハングルで書かれた資料とその性格」、『基礎ハングル』8、東京：三修社
- 管啓次郎（2005）『オムニフォン：〈世界の響き〉の詩学』、東京：岩波書店
- 田中克彦（2001）『言語からみた民族と国家』、東京：岩波書店
- 崔真碩（2009）「「ことばの呪縛」と闘う：翻訳、芝居、そして文学」、青山学院大学文学部日

³¹ 刊行年について、翻訳書や文庫版は、原著ではなく、翻訳書や文庫版が出版された年を記している点に留意されたい。

本文学科編（2009）所収

- 辻野裕紀（2016）「言語教育に伏流する原理論的問題：功利性を超えて」、『言語文化論究』37，福岡：九州大学大学院言語文化研究院
- 辻野裕紀（2020）「〈境界〉に佇立すること，〈境界〉画定を峻拒すること：複数の言語を生きたるために」，辻野裕紀・大津隆広・田中俊也編『連続講義「ことばの科学」2016-2018』（言語文化叢書XⅩⅢ），福岡：九州大学大学院言語文化研究院
- 辻野裕紀（2021a）「韓国語から見た対照言語学の可能性：日韓対照言語学的思考の系譜と展望」、『東アジア日本語・日本文化研究：新機軸の日本語・日本語教育研究』29，福岡：東アジア日本語・日本文化研究会
- 辻野裕紀（2021b）「ことばを喪失するという事，ことばを記録するという事：映画『マルモイ ことばあつめ』によせて」、『言語文化論究』46，福岡：九州大学大学院言語文化研究院
- 辻野裕紀（2021c）「詩人尹東柱と福岡」、『言語文化論究』47，福岡：九州大学大学院言語文化研究院
- 辻野裕紀（2022）「韓国語 日本語人を「言語学者」にする言語」、『群像』2022年3月号，東京：講談社
- デリダ，ジャック（2005）『声と現象』，林好雄訳，東京：筑摩書房
- 南富鎮（2006）『文学の植民地主義：近代朝鮮の風景と記憶』，京都：世界思想社
- 沼野充義（1995）「翻訳をめぐる七つの非実践的な断章：奇跡と不可能の間で」、『早稲田文学』228，東京：早稲田文学会
- 野間秀樹（2021）『言語 この希望に満ちたもの：TAVnet時代を生きる』，札幌：北海道大学出版会
- 白水社編集部編（2022）『『その他の外国文学』の翻訳者』，東京：白水社
- 蓮實重彦（2018）『表象の奈落：フィクションと思考の動体視力』，東京：青土社
- 波田野節子（2008）「文学テキストをどう訳すか：実践的翻訳論」，野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第4巻』，東京：くろしお出版
- ハン，グカ（2022）「母語でない言語で書くということ：言語の重さと速度，そして距離」，辻野裕紀・金兌妍訳，森平雅彦・辻野裕紀・波瀆剛・元兼正浩編（2022）所収
- ハン，グカ×辻野裕紀（2022）「《対談》フランス語のほうへ／から：母語として存在しない〈物語〉をめぐるダイアログ」，辻野裕紀訳，森平雅彦・辻野裕紀・波瀆剛・元兼正浩編（2022）所収
- ベンヤミン，ヴァルター（1994）『暴力批判論 他十篇』，野村修編訳，東京：岩波書店
- ボルヘス，J.L.（2011）『詩という仕事について』，鼓直訳，東京：岩波書店
- 三島由紀夫（1959）『文章讀本』，東京：中央公論社
- 三原芳秋・渡邊英理・鶴戸聡編（2020）『クリティカル・ワード 文学理論：読み方を学び文学と出会いなおす』，東京：フィルムアート社
- 森平雅彦・辻野裕紀・波瀆剛・元兼正浩編（2022）『日韓の交流と共生：多様性の過去・現在・未来』，福岡：九州大学出版会
- 柳父章（1982）『翻訳語成立事情』，東京：岩波書店
- 山本真弓編著，白井裕之・木村護郎クリストフ著（2004）『言語的近代を超えて：〈多言語状況〉を生きるために』，東京：明石書店

米原万里（1998）『不実な美女か貞淑な醜女か』，東京：新潮社

リービ英雄（2001）『日本語を書く部屋』，東京：岩波書店

渡邊英理（2020）「言葉」，三原芳秋・渡邊英理・鶴戸聡編（2020）所収

* 本稿は、2020年度東京大学大学院人文社会系研究科・文学部集中講義「韓国文学と翻訳」（辻野裕紀）で講じた内容のごく一部と、対照言語学研究会第2回例会（2022年3月14日）での発表論文「翻訳雑攷」を基にしている。

* 今年度（2022年度）末で東京大学をご退職される福井玲先生のこれまでの学恩に、この場を借りて衷心より感謝申し上げたい。なお、本稿のタイトルは福井先生の「古代朝鮮語についての若干の覚え書き」というご高論の題目を変奏させたものである。古代朝鮮語に関する知識がほとんどなかった学部生の頃にこの論文の抜刷を先生から頂戴し、一生懸命拝読した記憶がある。先生からいただいた初めての抜刷でもあり、思い出深い論文である。

A Short Memorandum on ‘Translation’

TSUJINO Yuki

This paper aims to look into the practice of “translation” in a comprehensive fashion. Some perspectives involving translation, which I deem as especially important among various other standpoints, are shown in the form of a memorandum along with personal views.

More specifically, discussed in detail here are (1) relations between translation and linguistics; (2) pessimism and optimism in translation; (3) translation as equipment to recoin languages; (4) issues concerning literal and non-literal translation; (5) the material aspect of languages; (6) translation’s dynamics; (7) recipients of translation; (8) translation into a vernacular; (9) the discovery of “Japanese” as a unit; and (10) Japanese as an underlying language on the Korean Peninsula.

Multiple clues to delving into the practice of translation at full tilt are successfully presented via utilizing as reference points the findings from language studies, literature and other systems of thought beyond the framework of linguistics in a narrow sense. Although South Korean literary works are successively translated into Japanese at a never-imagined speed these days, discussions do not appear to be held as aggressively with the purpose of questioning thoroughly the essence of the conduct of “relocating” or “translating” languages. I expect this paper to mark the beginning of such research, but modestly.